岐阜・柿田（かきだ）遺跡

1　所在地　岐阜県可児市大字柿田字前山・孫六・杉坪・月田・三字古・三次子・六ノ坪・稲垣・尻無・池尻・甫田上、可児郡御嵩町大字顔戸字三次子・尻無

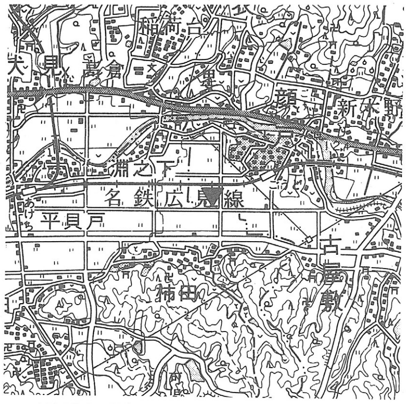
2　調査期間　一九九九年（平11）五月～継続中

3　発掘機関　(財)岐阜県文化財保護センター

4　調査担当者　藤岡比呂志・野村元次・近藤大典ほか

5　遺跡の種類　集落跡・水田跡

6　遺跡の年代　弥生時代～中世



（美濃加茂）

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

柿田遺跡は、「柿田条里」として周知され、近年まで良好に遺存していた条里地割内に所在する。ここに東海環状自動車道の建設が予定され、まず柿田遺跡の北側に所在する顔戸（ごうど）南（みなみ）遺跡を調査し、弥生時代末から古墳時代中期にかけての集落跡・灌漑施設や、古代にさかのぼる条里の坪境と考えられる道路状遺構などを検出した。続いて顔戸南遺跡の南側で、インターチェンジの建設予定地として柿田遺跡の発掘を行なうこととなり、一九九九年から約八万m²におよぶ範囲の調査を継続して実施している。

これまでに判明した遺跡の概要は次の通りである。①弥生時代から古墳時代後期にかけての集落とそれに隣接する流路。②古代の溝や流路と条里の坪境に造られた道路状遺構。溝や流路からは、大量の須恵器とともに七・八世紀の人形・馬形などの形代、「美濃国」刻印須恵器などが出土している。③中世の建物群数ヵ所と溝や流路。④中世後期以降の水田面。この水田面は古代以来の地割を継承し、その上に造られていたこと、それが近年まで残存していた景観の基礎となったことがわかった。また各時期の流路内からは、堰や堤の基礎となった木組を検出し、同時に農耕具や建築部材などの木製品も大量に出土した。

木簡は、一三世紀前半に埋没したと考えられる溝から出土した。溝は、ほぼ条里地割に則って区画の北・東・南方を方形にめぐるように掘削されており、現状で最大幅は約二m深さは〇・七mで、東西は約七〇m、南北は断続的に検出しており、復原すると約七〇mにおよぶ。溝の東北角と東南角を確認しているが、北溝は西で南に曲がらず西溝はなかった。南溝は東南角から数mにわたって検出し

たのみである。木簡は溝の東北角近くで、二層に分けられる埋土の上層の下部から出土した。溝は流れがなくよどんだ状態であったと思われ、大量の植物遺体が詰まっていた。他に山茶碗・陶磁器や鉄製斧なども出土した。

溝で囲まれた範囲内からは、建て替えが認められる大型の総柱建物六棟以上、方形の大型土坑、井戸と思われる小型土坑などを検出し、館跡であることが明らかとなった。木簡はこの館に関わるもので、館の廃絶にともなって廃棄されたと考えられる。

館に伴う柱穴や溝、土坑などの遺構、直上の包含層などからは大量の山茶碗、陶磁器類が出土した。山茶碗には墨書が施されたものも散見される。

さて、柿田遺跡の所在地は、可児郡曰理・郡家両郷にまたがって所在した石清水八幡宮護国寺領の明知庄（明地・明智とも表記）の推定範囲内である。明知庄は、一〇世紀後半に藤原実頼の所領として史料上に姿をあらわし、一一世紀後半、藤原通俊の代に石清水八幡宮護国寺に寄進される。元永元年（一一一八）には白河院が同寺内に建立した大塔院の仏聖灯油料として明知庄の収益があてられることになり、あらためて四至牓示が打たれた。室町期には、明知庄は上下に区分されていたことが知られる。また一四世紀には土岐源氏の一系統が庄内に入り込み、明智氏を名乗る。

今回の調査によって明らかになった中世の館跡は、建物の規模や木簡を含めた出土遺物から、明知庄に関わるものと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「三斗かう□
　　　・「□□□　三×　　(82)×17×2　019

(2)　「　　　□〔志カ〕□
　　　　　［□〔着カ〕善根　仁王会
　　　　　　奉
　　□〔法カ〕□　］　□　□　」　　(81)×214×5　081

(3)　□」　　(81)×11×3　059

(1)は付札木簡である。表面の五字目は傷があり、はっきりとしないが、「と」または「ど」の可能性がある。現在遺跡の北側の地名に「顔戸」があり、あるいはこれに通じるかと思われる。

(2)は痛みが激しく、現状で六片に割れており、他に失われた部分がある。文字は、上下両端を残す材に一行の字数は不明であるが、六行にわたって記されていることが確認できる。裏面に文字はない。木簡の字数を復原的にみてみると、材の右端は失われているが、「仁王会」の文字の上のスペースを考えると、現状より材の右に文字があったとは思われない。文字の方向の下方には、材を横に利用していることから、横より縦が長くなることは考えがたいので、最

大で四文字程度想定できる。したがって、一行六～七字で六行にわたり文字が記されたと復原できると思われる。

さて、木簡の性格であるが、「仁王会」という書き出しや「善根」「奉」などから仏教との関わりが明らかである。遺跡の性格もあわせ考えると、木簡は、法会を行なった際、その旨と功徳を願って僧に書いてもらう「巻数」にあたる可能性がある。

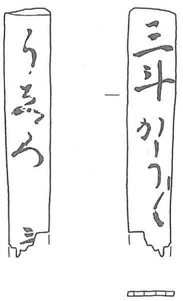
(3)は形状から付札木簡と考えられる。

この他、墨痕のある小片が二点ほど出土しているが、肉眼観察から(2)の木簡と同一個体と思われる。

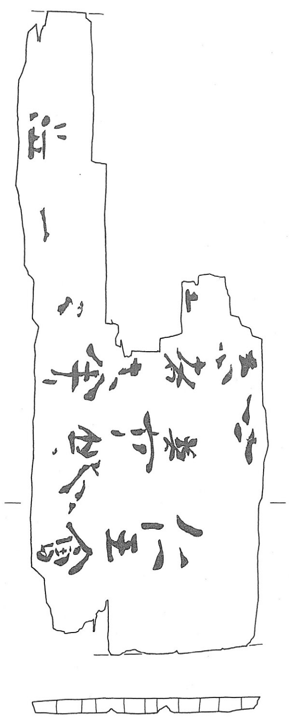
現在、遺跡は調査中であり、また遺物の整理作業も始まったばかりである。それらの成果や、また明知庄関係史料などとあわせ、今後さらに検討していきたいと思う。

なお、木簡の検討にあたっては、奈良大学の寺崎保広氏・山形県立米沢女子短期大学の三上喜孝氏・皇学館大学の渡辺寛氏のご教示を得た。

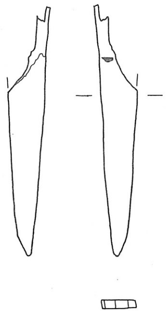
（近藤大典）



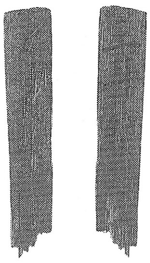
(1)



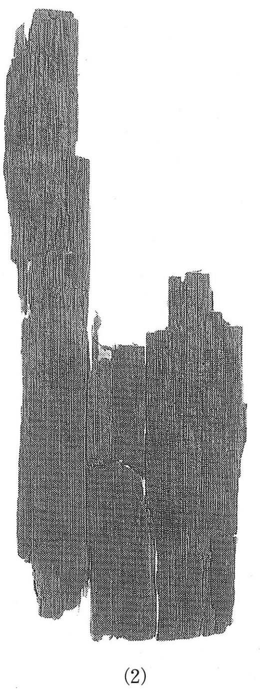
(2)



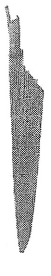
(3)



(1)



(2)



(3)